

総評 2024年4月分 杉本真維子

「おかえりの狼煙を上げて光る米」中村 航太（福岡県）

炊飯器のタイマーを帰宅時にセットしていたのでしょうか。待たれていることのうれしさとお米が炊き上がることのうれしさが合わさって、あたたかくて愉快的気持ちになります。

「コンセントさすときの音花曇」有野 水都（東京都）

曇りという意味によってつながられる音と空（そら）。ぐぼっというあの音にも空が含まれているのかもしれませんが。空がある場所は必ずしも頭上とは限らないようです。

「カニの殻ぱきぱきぱきぱき授賞式」杉本 太（北海道）

おもしろいです。「ぱきぱきぱきぱき」という賑やかな音。拍手のようでもあり、場が一気に華やかになります。この明度はまさに「授賞式」ですね。

「臨月の微睡みのなか／缶切りの擦れる音は／星のなきごえ」常田 瑛子（山口県）

「星のなきごえ」という言葉の豊潤さ。母体と胎児のあわいに音が灯るようです。

「潰されたおにぎり何度も思い出す／笑うことってプライドだった」睦月 雪花（愛知県）

気づきや発見は、詩の種（たね）なのだと改めて確認しました。

「眠る子の頭をなでるたび／胸の小瓶にたまっていく星の砂」睦月 雪花（愛知県）

愛情を視覚化したいという願いが言葉で叶えられています。みながそれぞれにそれぞれの星の砂を持っているのですね。

「永き日の水面掠める背鰭です」奥井 健太（滋賀県）

「掠める」という言葉が水の透明感を発見しています。

「先方と肺を褒め合う緑の夜」斎藤よひら（京都府）

心という見えないものを互いに通わせるさま。先方と当方の向き合うすがたに絵画的な美しさがあります。

「迫り来る飛行機の喉松林」奎いう子（佐賀県）

近づいてくる飛行機の喉という何らかの不穏。飛行機が墜落するようすを松林の目線で捉えたのでしょうか。

「生きていて扇風機売り場を通る」福山ろか（埼玉県）

家電という、にんげんの仕事をうけおったモノに宿る、にんげんくささ。そのそばを通ることで、作者は自己のにんげんくささ（いのち）をきゅうに意識したのかもしれませんが。感受性の力が際立っています。

「目刺嚙む草むらにアーッがひびく」宮崎 莉々香（神奈川県）

ほかの投稿作も読みましたが、作者は文法をやすやすと超えていて、期待がもてます。文

法を超えるということは常識を超えるということですので容易いことではありません。意味そのものはとれませんが、「アーッ」が切り立ち、表記も新鮮で印象に残りました。

「むきだしに、春だ／折り込む袖口がひかる／夜空の摩擦に飢えて、」こはくいろ（大阪府）

袖口からちらりとのぞく肌のように、少しだけ見える夜空。春の裏側に夜があるような複雑な構成がおもしろいです。

今回も新しいかたが続々と参入されています。次回も楽しみにしています。